

質疑応答

上田: ご質問をお願いします。

宮島(西部文理大学): 非常に興味深いお話だった。教育の商品化というのは、日本では80年代ごろから非常に進んでおり、たぶん、この中にいらっしゃる方も塾とか行っておられたと思う。最近読んだ本で感銘を受けたものがあるのだが、日本の子ども達の勉強の仕方がごまかし勉強になっていると指摘している本があった。それが実は子ども達を勉強嫌いにさせてしまっていると言っている。ただ、たとえば佐藤学先生などが言うには、勉強は嫌いなのだが、子ども達は学ぶことはしたいんだと、ただ、彼らは学び方を知らないんだということをおっしゃってる。そこでいわゆるスキルを子ども達に少し伝えていったらいいのではないかなと考えていたのだが、今日のお話を聞いて、スキルが商品化のひとつということで、今、イギリスの教育もスキルというものにだんだんシフトしていっていると思う。つまり知識だけじゃじゃなくて、スキルというものを非常に重視していると思う。その教育がスキルにシフトすることによって、イギリス社会にどんな影響を与えるのか。先生のお考えをお聞かせ願いたい。

ボール: 答えはまだわからない。評価システムの変化によってどのような変化がもたらされているかについてのリサーチがまだなされていないので、予想がなされていないというのが現状である。

しかし、試験によってどういう学習がなされているかということについてますますたくさんリサーチがなされてきており、恐らく、学習の性質というものが非常に狭いパフォーマンスに結びつくようなスキルに転化されるようになってきているということが今後明らかにされるようになってくるのではないかと思う。

パラドックスであると思われるのが、学習に対する試験の効果について問題視している人々がビジネスの人々で、ビジネスの人々というのはテストによってパフォーマンスをはかっていくということを推進してきた人々であるが、その人たちが雇用を推進するときになって適切なスキルが被雇用者に身に付いていないということに懸念を覚えるということが起こっている。

ロバート・アスピノール(滋賀大学経済学部): 前の質問と関連して、リオタールの引用にある「教育のための教育」は、役に立つ教育になるのではないか。たとえばオックスフォード大学やケンブリッジ大学の伝統的な科目、たとえば、ラテン、歴史などは、卒業生にとってすごく役に立つ。よって、「教育のための教育」は、役に立つ教育と同じ可能性があると思う。それに、職業教育はイギリスでもう一つの問題である。職業教育の評価はとても低い。頭のいい子どもは伝統的教育を選び、職業教育のコースは選ばない。だから、昨年出たトムリンソンレポートでは、そのような問題が深刻であることを述べており、ボール先生の今日のお話と矛盾していると思う。

ボール: あなたの指摘は正しいと思う。たしかに、教訓には矛盾があって、伝統的な要素がまだそこにはあるのだが、片方で矛盾する要素が入ってきているというのが現実である。トムリンソンレポートの主張というのは、アカデミックな要素と職業教育的な要素を統一して、競争原理を貫徹させるということだったのだが、そのような主張は選挙民にとっては、あまり人気のない方針なので、政府は当面選挙まではそれを導入しないということを決定した。

もうひとつ指摘しておく、公正性ということに関することである。ニューレーバーの方針のひとつの特徴は、もちろん、競争にコミットしているわけだが、片方で社会的排除をなくしていくことにも努力している。そのひとつの方法は、低収入の子ども達を大学に入れるということであるが、国家的な経済を推進するためのものであり、そういうことを片方で推進しているということがあがるが、もう片方では、大学間のヒエラルヒーはそのままにしている。よって、低収入の家庭出身の子ども達は大学に入ってもその大学を卒業できなかったり、あるいは市場的な価値の低い大学にしか入れないといったことが起こっている。よって私の話はどの部分をとってみても決して単一の組織原理があるというのではなく、非常に複雑な矛盾する過程が同時に起こっているのだとご理解いただきたい。

柴田(筑波大学): 先ほど宮島さんが、教育の商品化というのは日本では 80 年代から始まったというお話があったが、これに少し関連して、イギリスにおける教育の商品化が、先生がおっしゃるようにニューレーバーの教育政策の一番大きなインパクトを受けた結果かどうかお聞きしたい。先生自身もおっしゃっているようにいろんなアスペクトなりエレメントの影響を受けた教育の商品化があると思うが、先生のお話を聞いているとニューレーバーの政策が一番大きな影響を与えたという主張をしておられ

るように聞こえる。しかし、たとえばもっと他の要素が影響した結果ではないかと私は考える。たとえば、非常におもしろい事例としてあげられた『ジュニア』だとかそういういわゆるミドルクラスの人たちが読むマガジンがある。それはアメリカでいうと、『ハーバーブラザーズ』『バニティフェア』とか、いわゆるアメリカのミドルクラスの親たちが自分の子ども達を育てるのに利用するような本、こういうものがイギリスにも浸透している。これはニューレーバーの教育政策の結果というよりは、アメリカナイゼーションの影響じゃないかなと考えたりする。たとえば、私の弟は地方で子どもを育てているのだが、同じようなことが起こっている。やはり20年前の農村にはなかったような子どもの育て方が、今の若い夫婦達がたとえば自分の子どもにバレエを習わせたり、バイオリンをならわせたりということがやはり日本でもおこっている。であるから、これは労働党の政策の転換ということもあるが、全体的な地球規模の動きなのではないかと考えるのがひとつである。

もう一つの例としては、先生が言及されたアフオーダビリティ、両親が安くはない雑誌を購入する経済力がついたという、そちらの方が大きなインパクトを与えたのではないかなと思っている。つまりまとめると、ニューレーバーの政策というよりは、グローバルキャピタリズムのイギリス社会への浸透というふうに見た方が、もしくはその中でニューレーバーの政策転換と言った方が理解しやすいのではないかなと思った。

ボール:あなたのご主張は完全に正しいと思う。イギリスで起こっている変化というのは世界規模で起こっている一般的傾向にさかのぼることができると思う。そのことは、二つの意味から裏づけられると思う。ひとつはミドルクラスの職を巡っての競争が非常に激化している。特に1990年代初期のブラックマンデー以後、職業採用のためのプロフィールの取り方が変化してきており、とくに専門職を養成することにおける過剰生産が起こっていることによって、親たちの心配が増しているということがひとつの側面としてある。もうひとつこのような事の効果に関する例というのはたくさんあるのだが、ひとつは先ほども述べたような高等教育に入る子ども達が増えることによって、かつてはミドルクラスが排他的に獲得していた特権が得られる可能性が相対的に低くなることによるミドルクラスの親たちの心配が増加していることが言える。そのようなミドルクラスの親たちには子どもを特定の大学に入れたいという欲望が見られる。

もうひとつの側面というのは、やはり資本というのは常に利潤を追求すると言うこ

とが持っている圧力である。かつては原料を生み出すような製造業というものが利益を生み出していたが、それが発展途上国に移行するに従って、資本というのがどこから利潤を挙げてくるかと言うことを探したときに、公的セクターというのは予算をかなり使用するの、そこへアクセスをしようとする傾向がある。実際に年次予算というのが、先ほど述べてきた PFI(Private Finance Initiative)、ビルディングをプライベートセクターが作ってリースするというシステムに 25 億から 30 億ポンドが使われているし、犯罪者を収容する刑務所の予算などを含むと、100 億から 120 億ポンドの予算が使われている。

ニューレーバーが導入しているのは一つの機会ではない。民間セクターが参加する領域における新しい発展のための一種の社会的実験である。たとえば、PFI は、1992 年に非常に小さい規模で保守党によってわずかずつ始められたものであるが、労働党によって大規模に拡大された。現在、PFI の借金の規模というのが 1 兆ポンドにのぼっている。PFI は発展途上国への資本発展の援助モデルとして世界銀行の関心を引き、そのような考えが発展途上国にも輸出され、発展途上国でも学校や橋といった公的インフラストラクチャーに民間の資本が導入されるということが一般的になっている。

天童 (名城大学) :名城大学の天童です。商品化の時代における子どもの価値の変容についてお伺いしたい。子どもの意味をどう変えたかということです。

ポール:あなたがお聞きになったのは、価値ですか?それとも諸価値ですか?今私はバリューが単数形か複数形か尋ねました。単数形を用いるか複数形を用いるかは根本的な違いに関わっており、それが今回のメインピックでもあるが、単数形のバリューというのは、商品化され量化されたものにつながっており、それはたとえばバリューアディド、付加価値というようなことからわかるように、表面的で経済的な価値に関わっている。たとえば、私が RAE の評価において今回招聘されることが私の付加価値を高めるのだというのがこの単数形の価値にあたる。それに対して複数形のバリューズは、信念だとか行動の仕方、世界の見方、人間性といったものに関わる。どういう価値に個人的にコミットしているか、自分の行動を規制するものにどのようなものを選んでるか、そういったものに関わっている。単数形か複数形かによって対象的な意味を持つ。全体的な傾向として複数形のバリューズが弱くなって、単数形のバリューに強調点が置かれるようになった。

しかし、実際の保護者の行動においては、両者が混乱して存在しているというのが現実である。片方で保護者は子どもが成長していくことに満足していて、より良い人として育つことを期待していて、だからこそ彼らを音楽教室に通わせるわけであるが、片方でそういうことがもっている利益があり、たとえば、私立学校にやって音楽をすることは、単数形のバリューを高めることであり、大学入試において非常に有利に働くということがある。だから、一つの方向から、もう一つの方向への移動と言っても、現実には非常に混ざった状態で存在している。

山村(大学入試センター): はじめの宮島さんの質問に対する先生のお答えに関連しての質問である。市場化とか商品化の効果というのは GCSE という試験による結果でその効果を測るというのが主流で、それによってその効率性なり効果というのが主張されていると思うが、それに対して批判的研究者、たぶん、先生もそうだと思うが、どういう指標や方法を使って批判的な研究をされつつあるのか。

ボール: ちょっと奇妙な言い方に聞こえるかもしれないが、私は批判的にはなろうとしてはいない。もちろん、批判的にはなろうと思えばなれるがそれは私がしようとしていることではない。私がしようとしていることは、どういうことが起こっているのかというプロセスについて記述して分析をするということであり、社会の様々な側面において広範に総合的に起こっている現象を記述し、分析するということである。私の配布論文の最後の方にポッシビリティということを書いており、それに下線を引いているが、それは認識論的な転換ということを指しており、社会全体における社会的な関係において一般的に見られる転換というもの新しく根本的なものなのではないかというのが主張としてある。

私がしようとしているのは様々な例をカタログ化していくということである。どんな例かというと、出来事、事件、政策、実践、プロセス、言語、行動といったものの事例になるが、それぞれは非常に些細なものかもしれない。たとえば、雑誌の例を挙げているが、それぞれは些細なものかもしれないが、それぞれをつなげ合わせてまとめてみると、たとえば親業、親として振舞うことについての変化を示すものになるのではないかと、おそらくはそれによって、私たちが自分に対して、相互に対してどう関係作りをしているかということを示すものになるのではないかと考えている。

質疑応答 (23日)

私がやろうとしていることは、一つの理論なり主張を作ることであるが、私の主張なり理論が正しいとすれば、その次に問うべきことは、私たちがそれについて心配すべきかどうかということであると考えます。

上田: まだご質問もあろうかと思うが、はなはだ残念であるがこれで質問を打ち切りたいと思う。明日も企画があるので、その時にでもその内容と絡ませて質問していただければ、大いに深まるのではないかと思います。お暑い中お集まりいただき、ありがとうございました。

(記録: 中島 千恵)